

5 性指導について考える

1 これまでの経過と今年度の取り組み

「性指導」ということで研究グループをつくり、3年間が経過しようとしている。この間、子ども達の性感情や行動をよくつかみ、受けとめることから出発するとともに、成長発達に合わせ実態に即した指導について模索をおこなってきた。また、実際に指導をすすめるにあたっては“性教育”そのものについてのとらえなおしもおこなわれ、そのつど討議を重ねてきたといえる。その中でそれぞれが共通に大切なものとして考えてきたことは『平成元年度研究紀要』に述べてあるとおりであるが、それらは今日においても実践の大きなよりどころとなっている。あえて、その箇所を引用すると次のとおりである。

- ① 性教育は、男の子あるいは女の子として生れ、死ぬまで自分の性をみつめて生きること、そして、その中で男女の協力、いたわりあい、命の尊さなどを学び、まさに性は生、生きることの教育、人間教育であるということ。
- ② 教えるべきことは、きちんと教えるという姿勢をもつこと。子どもたちの真剣な問いかけには、決して逃げることなく事実、真実を語り、子どもの悩み、不安の相談にのれる教師でありたいこと。
- ③ 性指導に限ったことではないが、とりわけこの分野では、より一層家庭との連絡、協力が必要であるということ。
- ④ 性の自立は、時間を要する学習とトレーニングである。したがって、小学部から高等部まで、障害の軽重を問わず、年齢相応・発達に応じた指導とその子なりの自立があるということ。
- ⑤ 在校生を見つめ、その指導のために、卒業生や年長者の性感情や行動を親や施設指導員の人たちと話し合う研修の場をひろげたいこと。

これらは、実践をおこないながら検討を加え、さらに実践をおこなうということでねりあげたものであり、性教育のねらいや指導の基本、さらには指導にあたっての配慮すべき点が盛り込まれているといえる。

以下、①～⑤の点にてらしてこれまでの実践をふりかえるとともに今年度の取り組みの重点についてもふれることにしたい。

はじめに、①についてである。ここでは人間教育の立場から生命の尊重という点が大きなテーマといえるが、これについては特に一年次において多く取り組まれている。『研究紀要』からひろいだしてみると、「毎月の誕生会」（小学部）、「私の誕生」（中学部）、「生命の大切さ」（高等部）がそれにあたるといえる。また、二年次における「ぼくのこ」とわたしのことを知ろう」（中学部）もいたわりという点では深くかかわっているといえる。『研究紀要』にはふれられてはいないが高等部の卒業学年には卒業をひかえあらため

て自分の生いたちを知ることから毎年「生活」の時間に「私の誕生」ということで学習をすすめているし、今年度も予定されている。

次に②についてであるが、ここでは真実を発達段階に即してきちんと教えるということが中心をなすといえよう。一年次の「ぼくの体わたしの体」（中学部）、「生殖のしくみ」（高等部）、さらに二年次では「からだについてしよう」（中学部）がそれにあたる。それぞれの取り組みは科学的な正しい知識をもたせるという点では紙芝居を活用するなど積極的な試みもみられたが、自閉児のようなタイプの生徒にどのような指導を行うかといったことなどまだまだ課題は多く残しているといえる。今年度はもっと自然に目をむけさせ自然界のできごとを観察し、科学的にものごとを考えるということから動物のオスとメスや親子をとりあげ指導を試みてみた。

③にうつりたい。家庭との連絡、協力ということではこの三年間一貫して取り組んできたのは懇談会や学習会である。一年次は教師と親がそれぞれかかえている問題を話し合うことから始まり、「不安や悩みを話し合える関係になりたい。」という発言にもみられるように双方がわだかまりなく話し合える場が教師集団、父母集団というレベルでできるようになったことは画期的であるといえる。二年次においてはさらにそれを発展させ、講師（産婦人科医）を囲んでの学習会をもつなどして父母と教師が共通理解を深めることに力を注いだ。そうした中で共通のテーマ もうかびあがりマナーのことを中心に話し合いがもたれるようになった。三年次においても気楽に話し合える雰囲気の中から積極的発言が多くみられ、恥じらい、おしゃれ意識、性の文化といった内容がとりあげられるまでにいった。

つぎに④の性の自立に関してであるが、これは、二年次から三年次にかけて取り組んだスポーツウェアのズボンをファスナーのあるものに切りかえての排泄指導がその1つにあたるといえる。これは、トイレマナーの重視から取り組まれたものであり、ファスナーつきのズボンに切りかわった時点で中学部・高等部ごとに男子生徒を集め大人の大きさの人形を使って一斉指導にもあたった。もちろん指導の徹底ということではこれで終わりとせず実際の場においても必要な働きかけを日常的におこなってきている。

最後に⑤の点についてであるが、この三年間の中では市内の作業所の職員と性指導のメンバーが懇談会に参加しているが、これは作業所側からの要請によるものである。「研修の場を広げたい」ということである以上、こちらの側から積極的に研修の場を持ち指導の重点もそこから引き出すことが必要と考えるがまだ立ち遅れた現状にあるといえる。

以上、性指導の研究グループの中で共通して大切に考えてきた点にもとづいてこの間の経過および今年度の取り組みについてみてきた。このうち、今年度の実践の中から小学部の高学年を対象にした「生活」の授業、中学部、高等部の男子生徒対象の性を意識した排泄指導、そして教師と父母の懇談会について以下述べることにしたい。（安 田 茂 章）

2 今年度の取り組み

(1) 男子のトイレマナー

ファスナーつきトレーニングズボンへの改善 昨年度から男子のトイレマナーのことが話題となって排尿指導に取り組むきっかけともなったある出来事について述べたい。

平成元年の5月。高等部の関東修学旅行のおり、東京へ向かう高速道路のサービスエリアでトイレ休憩した時のことである。生徒たちがトイレにかけこむ後から入っていった私たち教師が見たものは、真白くもまばゆいばかりにならんだお尻の列であった。修学旅行の服装は制服である。ファスナーがあるズボンを膝あたりまで、中には足首までおろして放尿しているのである。ズボンは地面につかばかりであり、放尿の飛沫がかかり汚ないことこの上ないのである。ペニスに手を添えずしている子もいた。子ども達の表情には、恥ずかしいといったものはないのである。私たち以外の一般の人も多く、そうした人たちの視線が気になった。全く気づかない人もいたが、お尻を目にして思わず笑う人も多く、実に恥ずかしく、冷や汗のでる光景であった。

このことはその夜の旅館での話題となり、旅行後は早速私たちグループでも取り上げることになったのである。

これまで学校においてもお尻をだした排尿風景を目にしなかったわけでもないが、白いお尻が見事にならんだ光景と一般の人も多くいた公衆トイレであったことが、強烈なパンチを与えてくれたのである。考えてみると、本校では中学部、高等部とも登校後はトレーニングウェアに着がえ、日中はその姿で過ごすことがあたりまえとなっている。したがって小用の時はトレーニングズボンを押し下げてすることになる。このことが上の出来事の原因とはいえないまでも、ファスナーのあるズボンの時でもそうした行動に結びついたことは容易に考えられるのである。しかも手で押し下げないと排尿できないファスナーのないトレーニングズボンではペニスをもってすることにも困難がともなうといえる。ペニスを持たないために放尿が便器からはずれてあたりを汚したり、あらぬ所にあたって飛沫が衣服を汚すといった光景を時々目にしたこともあった。

そこで、私たちグループでは中学部・高等部の同僚に呼びかけ、男子のトレーニングズボンをファスナーのついたものにすることを提案してきた。小学部については数年前よりファスナーつきにしており、学校全体で一貫性をもたせるということで合意を得ることができた。一方家庭の方にも、男子の排尿時における日常的なマナーを身につけさせることの必要性、ズボンのファスナーのあげおろしを学校生活の場において習慣化させたいということを理解してもらい、あわせて要望、意見も取り入れ、新しいデザインのトレーニングウェアにきりかえることになったわけである。

排尿指導 ファスナーつきのトレーニングズボンに改善されたことから、次は当然排尿指導が必要となる。そこで中学部、高等部それぞれにその為の時間をとって指導すること

にした。共に職業・家庭や実習の時間といった男女別に行う学習があり、その時間を利用して、それぞれ男子生徒をまとめて指導することになった。この時一番問題となったのはどのように指導するかであった。実物を見せてするわけにもいかず、かといってお話だけでは指導効果があがらないことも明白である。実際に生徒が操作できればよいということで、実物大の人形を使って指導することにした。幸い他の学習で使った人形があり、それに包皮付きのペニスと陰毛を取りつけ、さらにパンツとズボンをはかせて使用することにした。そして下記の内容を具体的に教えることにした。

- ① しっかりファスナーをおろす
- ② ペニスをもってする
- ③ 包皮をむいてする（風呂でもきれいに洗う）
- ④ よくふる
- ⑤ しっかりパンツの中に入れる
- ⑥ ファスナーをしめる
- ⑦ 手洗いをする
- ⑧ ハンカチでふく

学校での採尿（小3）

- ①ズボンのファスナーを開けて
- ②チンチンを持って ③教師がかまえたコップにきちんと、おしっこをする。「たいしたもんだ。」あの1年生のトイレ訓練は悲痛だったと思い出す。

——小学部教諭のつぶやき——

「今日はおしっこの仕方の勉強するよ」といってはじめて最初の頃は、ざわついたり、無関心によそ見をしたりしていた子ども達が、人形をまのあたりにすると“どうなるのだろうか”と学習に集中してくるであった。とりわけ、ファスナーをおろしてペニスをつまみだした時は「チンポや」とか「おチンチン」といったことばが笑いと共にとびだしたが、すぐに静かになり真剣な表情で教師の次のことば、操作を待つのであった。教師の人形を使った示範のあと何人かの生徒にやらせたが、きちんとファスナーをつまめない子、あげられない子、パンツからペニスを取りだせない子などいろいろであり、それぞれ課題が見つかるのであった。勿論、全く問題のない子もいた。

この指導のおり、子どものサポートとして一緒に参加した同僚から「生徒の中には少し恥ずかしがっていた子もいたが、実物大の人形を使ったあれ位の具体的な指導でないといけないし、よかったよ。」という感想が寄せられ、心強く思ったものだった。この指導

女子トイレのファンのスイッチをきるよう頼まれた高等部のO君、
「ダメです」（エッ、ノ）
「恥ずかしいです」
（そう、そうだね）

——「僕、恥ずかしい」——

は小さい時からすべきものであるが「いまからでも遅くはない」そういい聞かせ、単なる身辺自立にとどまらず、恥じらいをもった生き方を願って指導をおこなってきた。さらに私たちのグループから、中学部、高等部での日常的な指導、取り組みにしていきたい。

（浦田東作）

(2) 小3組(小学5～6年生)授業「どうしてパンツをはくのかなあ」から

子ども達をみると、プールの着替えではバスタオルをまいて、それなりにかくそうと努力している。女子は更衣室、男子は教室と着替えを別にしているが、ややもすると着替えの途中で出てきたりする子もいる。ズボンの上からペニスをさわっている子や廊下を行き交う人に誰彼なく「男、女」と呼び掛けて、言葉遊びをうれしがっている子もいる。

合宿で泊まった時「おはよう」と言って、女子の部屋に入ってきた男の子、「まだ着替えていないから後でね」と、いったんしりぞけたが、いつのまにか入って来て、布団の上で遊んでいる。パジャマ姿の触れ合いはなごやかで、きょうだいのようなのである。男女仲良く楽しい一時であると思ったが、いつまでもいっしょでいいのか、着替えはプライベートなことである。高学年であれば、体にこだわっていいのじゃないか。もう少し、女子を意識してほしい。男子を意識させなければいけないと考えた。

学級担任からも、「気がついていないから、幼いからではなくて大人になることを意識させたい。」など、性に対して配慮していきたいということであった。

そこで、男子・女子用の大きさの違いや、色や型の違いのあるパンツを何枚も準備して子ども達と学級の「生活」の時間に学習を行った。

T:「みんなパンツをはいていますか？」

C:「はいているよ。」と答える子、言われな
いまでも、手が腰部にあるいは、ズボンの
すそに手を入れようとする子等であった。

T:「今日はパンツの勉強をします。」

T:「これはみんなのはいているパンツといっ
しょかな。」

T:「ここにパンツがいっぱいあるから、みてみようか。」

T:「こんなのをはいている人は誰かな？」

C:「はいはい」と手を挙げるS子。U子は上眼づかいに見ていた。恥ずかしそう。

T:「これだったら、どうかな、K君はけるかな。」

C:「……………」難しかったのか、分かっていないのか。

T:「ほら、これは大きいでしょう。海水パンツみたいね。こんなのをトランクスって
いうのよ。これは先生のお家の大学のお兄さんがはいているのと同じです。高等部の
お兄さんもおはいている人がいるよ。」

T:「こんなの(ブリーフ)はいているお兄さんもいます。」

C:「……………」N君はキョトンとした表情であった。Y君は知らんぶりのよう。

次に、一人ずつ前に出て、これらのパンツを男子用、女子用にグループ分けさせた。パ
ンツを一枚ずつ観察しながら、男子用は前開きであることを確認した。男の人のパンツと

読み聞かせの授業『あやの願い』

本の表紙の絵を見せながら、
「あやはなにをお願いして
いるのかねえ」と問いかける。

「およめさーん」と。

—— 赤い顔で答えた高等部生 ——

女の人のパンツには型の違いがあることを意識させたかったのである。昨年、この学級で作った大きな人形を使いパンツをはかせたりした。いろいろのパンツをはかせたかった子もいた。

T：「どうしてパンツをはくのかなあ？」と問いかけた。

T：「パンツをはかなくてもいいんじゃない？」「チンチンブラブラ。」

T：「チンチンを出したまま歩くのはいいですか？」

C：「恥ずかしいよ。」と顔をふせた子、「だめ！」と強く言い切り眉をくもらせる子、手で×サインを作って体をのり出してくる子等であった。

「どうしてパンツをはくのかなあ」という表題は長野県の養護教諭・坂口先生が一般の小学校低学年の学習に取り上げたものである。一般校の子ども達は、恥ずかしい、動物はパンツをはいていないが、人間だからはいているんだ、お腹の中に大事な卵が入っているからなど、次々と答えていたということであった。本校の子ども達には、ここまで求めることはできなかったが「恥ずかしい！」と、しっかり答えることができたのである。身近な下着（パンツ）を通してパンツの役割を意識させ、男女のからだの違いをねらったものである。白いパンツでなければならないとか、きちっとフィットするブリーフであるとか、ショーツはこれこれであるなど、一般校では下着の着用にまで制約があると聞こえてくるが、子ども達は自分の好みに合った下着を選択し、下着を通して自分の体を大事にする意識が高まればと考える。

排泄の自立ができるようにトイレトレーニングを続けて成長してきた子ども達である。文化社会の中に生きている私達は、子ども達にもその文化社会の中で自分の性を意識して生きていけるように働きかけたい。

授業のことがその日の学級通信にとりあげてあったのでここに一部を記しておく。

朝の雨で登校時にパンツまでぬれたA君、パンツのはきかえを指示するが、パンツをはいたまま立っている。

「ハッ」と気付いて更衣室の戸を閉めたところ、サッと着替えたという。

「私の存在を意識したんですね」と。

—— 高等部教師のつぶやき ——

子供達の体も確実に大人の体に近づいていっています。性の問題も“そのうちわかる”といった考えでなく、正しい知識をしっかり教えていくことによって、自分の身体を正しく知ってマナーのある大人に育っていくように思います。

『チンチンを出したまま歩くのはいいですか。』という言葉に、恥ずかしいと顔をふせた子供達。言葉だけでなく実際場で行為として表せていけたらよいですね。

また、学習がむずかしかった子は、日常生活の中で習慣として（人前でパンツを脱がないなど）身につけてほしいと思っています。

(3) 家庭との協力から

今年度も昨年に引き続き、家庭と性の学習会を行った。話題は子ども達との生活の中でみられる積極的なかわりや小学部からの緻密な積み重ねなど具体的な生活を聞くことができた。家庭は性の自立の実践の場であった。

ここで話し合ったことについてとりあげてみる。

◇トイレマナーのこと

- ・ ウンチをする時は、全部（パンツも）ぬいでしまい、大便をした後お尻がふけない。大便をする時、ズボンを下げてすることと、お尻をふくことの二つの課題は難しいけれども、大きくなってからでは困るのでとりくんでいきたい。
- ・ トイレのドアを開けてすることは、家庭では許されても公衆では恥ずかしいことである。発作などで介助が必要であってもドアは閉めてすること。
- ・ 外からノックされたら返事をする（ノックで）も大切である。
ドアをドンドンたたくのではなくノックのしかたを体験しよう。
- ・ ズボンのファスナーを下げて、男の子はおしっこをしているだろうか。
今年度から、中・高等部生のトレパンにも、ファスナーがつけられた。恥ずかしいという意識があれば、前開きがなくても上手にさげて用がたせるものを、その意識が薄いばかりに、公衆トイレでも高校生がお尻を出して排尿をすることになる。
（前開きのファスナーがあってもズボンを下げてしまう）
- ・ 小学部では入学時からトイレ指導としてファスナーから取り組んでいるのにややもすると楽な方にながれやすいので、家庭でも前あきのズボンをはくなどのとりくみが必要である。
- ・ 学校のトイレといえど男子トイレに女の教師は入りにくいんじゃないか。また、母親も公衆の男子トイレと一緒に入りきれず、大きい男の子を女子トイレには入れられない。

「あっ、おっぱい忘れた」と着替えの時、
「ブラジャーって言うのよ」と、祖母に
注意されていました。

家庭からの母のつぶやき

◇風呂やプールの着替えのこと

- ・ お風呂からあがって、来客のチャイムの音がすると、パジャマを着てしまわないうちに出て来る。
- ・ 姉（高校生）がきちっと、お風呂からあがらない先に入っていこうとする。
- ・ プールの着替えになると、女子・男子を別にしているが、自分が着替え終わると、おかまいなく入っていこうとする。
- ・ 男の子が裸になる時（スイミングの着替えがきちんと自立できていない時）母親の出番は難しくなる。

- ・ 息子の風呂に、母親はいつごろまでかかわれるか。

父親の帰りとかみあわず、充分でなかったが一人で入りたいがることもあって、ドアの外から声かけをしてきた。時には洗髪に卸ろしたてのシャンプーを全部使い、容器を空にしたこともある。プッシュ1回にこだわり、1回、1回と何回も押したのであろう。そこで、1回押したらドアの外に出す。体を洗い終わったところに声をかけることにした。うるさいかなと思いながら、きめきめに見張ってきたが少しずつ出きるようになってきている。父親には、時に性器の洗い方を指導してもらった。

- ・ 銭湯めぐりや温泉・海水浴で

家庭で気がつかないことが、銭湯などに連れだすことでとりくめることがある。

裸では外に出られんということや裸になっていい場所、裸になっていけない場所を意識する。また、男は男湯、女は女湯に入ることがわかってきた。入口の違いにも気づくようになり、お湯の調節（蛇口の押す、ひねるの操作）もできるようになった。

- ・ 公衆浴場でしっかり性器を洗っていた（さり気なく洗う、洗い過ぎでなくほどほどが難しい）
- ・ 入浴時の着替えを自分のタンスの引き出しから出して準備することも大切である。

◇恥じらいのこと

- ・ 恥ずかしいと言っているが恥ずかしいことがわかっていない。（行動が伴わない）
恥ずかしいことは本人の自覚である。自覚が出てくるのを待つのは大変なので、こだわりを利用して、このようにするのだというようにマナーとして形から入ろう。
- ・ 性についてオープンにしなければといつごろからか思うようになってきた。また、そのことは後でと先おくりにしないようにと考えている。特に身のまわりのことは先おくりできない。
- ・ 性のことはプライベートなことにかかわっていくので、いつも世話をしている母親であっても、男の子には父親の出番が必要である。父親の学習会が大切である。
- ・ 娘に「お父さんとお風呂はいるか」という父親の冗談に「お母さんと」と意識がでてきた。

性器いじりのことで悩んでいた
小学部のK君の母、
「そんなことで気にしまさんな、今から、
もっと、ビックリすることがあるよ」
と …………… 高等部K君の母。

—— 親子のたてのつながりっていいですね ——

◇性被害・性加害のこと

- ・ 男は男、女は女を意識するようになり「私はお母さんとお風呂」と言うようになってきているが、どこでどんな行為をするかわからないので心配である。

- ・ 迷惑をかけるか、かけられるかである。性被害のことも気になるので、女の子としての恥じらいのマナーを知ってほしい。

◇家族の触れ合いのこと

- ・ 上の子の恋愛や結婚、出産をみてきて、それなりに感じてきているようである。
- ・ 男子の生理について母親が分からない時、上の子（兄）に相談したりした。
- ・ 妹が「チンチンがへんになっているよ」と母を呼んだ。兄のペニスが勃起していて驚いたらしい。「大人のチンチンになってきたんだよ」と話し合ったことがある。
- ・ そろそろ、股間をさわりだした息子、妹も、裸にならなくなってきた。

などの内容であった。

パンツが黄色くなるのは、パンツでふいたりするから、

「パンツでふかないでねー」と息子に話したら、いつもならすぐ怒るくせに、思い当たるのか

「ウン」と返事をするのです。
やっぱり、さらっと話せばよいのです。

——卒業生の母のつぶやき——

夜の時間ではなく、子どもが小さいので昼の時間帯に学習会を設定してほしいという要望もあり、もっと父親との学習会を意図的に計画してはどうかといった意見も出ている。家庭の方でも積極的に性の指導に関するとりくみがみられ、性の意識が高まってきているようである。本校の育友会の家庭教育学級では、縦、横のつながりで学習会が企画され父親・母親が参加して研修の場になっている。学級懇談会でも、時々、

性にかかわる話題があがってきている。例年この懇談会に、学級担任の方から、計画的に性の話題をとりあげている学級もある。また、懇談のあとに母親と高等部女子といっしょに下着やおしゃれについても話し合われるようになってきている。

学校と家庭が協力しあって、それぞれの立場で語り合い、子ども達の性をみつめ子ども達の生活そのものを見守っていくことに意義があることを実感している。

（花 本 ヨシエ）

3 まとめ

これまでの「性指導」の研究活動について、1つの区切をつけるにあたり、本校の教育目標との関係から問いなおしてみたい。本校の教育目標は「……一人ひとりの全面的な発達をうながし、その子らしく精一杯生きる力を育てることをめざす」とあり、このことのもつ意味あいは大変大きいといわなければならない。性教育は単なる性器のみの教育ではなく、また性非行から身を守るといった予防的なせまいものでもなく、何よりも人間の生き方そのものの教育というとらえ方からすれば教育目標と大きく結びついているといえる。

しかし、実際の指導をどうすすめるかということになると多くの困難をともなうことも

事実である。この研究グループがつくられることによって性指導の取り組みは不十分さを残しながらも大きく前進したといえる。何よりも大きいのは、実際の授業をすすめるにあたって準備の段階から討議し、指導の後も卒直な意見とともに大きな励ましが次の授業意欲をかきたててきたようである。授業そのものについて大きな流れでみると、この研究グループが発足して間もなくはやや理念が先行していたきらいがあり、授業にも気負いのようなものが感じられたが2年、3年と継続しておこなうにつれ、より子供の実態に即したものになってきているといえる。とりわけ、今年度中学部、高等部の男子を対象にした排泄指導にみられるように教材・教具を工夫することによって教育効果を高める取り組みには三年間の重みを感じとることができるといえる。また、こうした取り組みは研究グループのメンバーのみにとどまらず、まわりにも広まってきているし、従来の指導そのものを、“性教育”という視点からとらえるところもみられるようになってきている。性指導の重要性が他の教師にもより認識されてきていることの証としてうけとめることができよう。

このように性指導そのものについてみると取り組みそのものは質量ともに高まりを見せているといえるが学校全体の教育計画の中に体系的に位置づけるまでには到っていない。すでにふれたように性教育は人間の生き方そのものの教育ということから内容としても多岐にわたり、しかも総合的であることから体系化のむずかしさも当然のことながらともなう。しかし、断片的な指導に終わらせることなく教師集団が組織をあげて取り組むには、やはり教育課程の中への位置づけが必要となるであろう。

さらに指導の方法としては指導形態を考慮するとともに効果的な教材、教具を工夫することが必要である。市販の教材、教具の活用も大切であるが子ども達の実態にあったものにするには、やはり手づくりの教材、教具は効果的であり指導者の創意性が求められる。

また、この教育は家庭との協力なしには十分な成果は期待できない。懇談会や学習会をととして父母の自覚も高まりをみせていることからさらに共通理解を深めていくとともに実践そのものも父母の願いや期待にこたえたものにしていかなければならない。

以上、三年間にわたって取り組みをおこなってきたが残された課題も多く性教育のもつ教育的位置づけからするとまだまだ緒についたばかりというのが率直なところである。これまでの蓄積の上にたってさらに豊かな実践をおしすすめ、この分野から少しでも本校の教育目標にせまることを願っているところである。

(安 田 茂 章)